

飛鳥資料館のみどころ（13）

展示品解説 その5

「山田寺の磚仏」

飛鳥資料館南東に位置する山田寺は、7世紀半ばに創建され、その当初の東回廊が倒れたまま出土した遺跡として著名ですが、その発掘調査では、金堂や塔内を飾ったと考えられる磚仏も多く出土しました。

磚仏は型に粘土を押し当てたものを焼き、金・銀泥や金・銀箔、彩色などを施して仕上げた像のことで、山田寺のものには4種類あります。このうち上下三段、左右四列に如来の坐像が並ぶ「十二尊連坐磚仏」が最も多く出土しました。表面は焼けて荒れているものが多いものの、当初は黒漆塗りの上に金箔貼りで、各尊を区画する突線の交点近くには釘穴うがが穿たれています。一部には壁土が融着していたことから、この磚仏は壁に直接打ち付けられていたのでしょう。

これらは塔跡から金堂跡の南にかけて出土し、とくに塔跡中央に集中して出土しました。ただしその出土数からは、塔の初層の内壁全体を埋め尽くすものではなく、一部の壁を飾っていたと考え

られます。「十二尊連坐磚仏」は山田寺以外でも、近くは奈良市の西隆寺や西大寺などからも出土しています。しかし、堂内部を飾ったものではなく、僧侶の念持仏や護符として使用されていたと考えられ、なかには廃絶後の山田寺から持ち去ったものが含まれている可能性もあります。

こうした磚仏には、遺構に基づき推定される建物の規模や様式からは窺い知れない堂内の様子を伝える貴重な品となっています。

（飛鳥資料館 清永 洋平）



十二尊連坐磚仏